

大通公園を望む窓辺から

在宅死

副会長 藤原 秀俊

もう10年位経ったのであろうか、わが家の最初の愛犬マイケルが亡くなった。15歳位であったので、人間で言う76歳～80歳であろう。1年くらい前から呼吸器疾患を患い、1週間程度動物病院の酸素部屋に入院していた。毎日見舞いに行くと健気にも尻尾を振り、気力を振り絞りわれわれに近づき、私達の唇周囲を舐めまくる。「先生どの位持ちますか?」「このままですと1週間位でしょうね」「連れて帰りたいのですが…」「すぐ亡くなると思いますが、よろしいですか?」「はい。家族と共に過ごしたいので…」「分かりました」マイケルを抱き、自宅に連れて帰った。確かに苦しそうであった。代わる代わるマイケルを抱き、周囲に一家が集まり、最後には膝の上で満足そうに亡くなった。帰宅時間は2～3時間程度であった。ペットの死の形はおおむねこのような形であろう。さて人間は?

開院して26年になりその間数人の在宅死を看取った。厚労省の医療費抑制策によるものでもないし、また病院の都合によるものでもない。家族に囲まれ、自宅の匂いを感じながら自宅で亡くなりたいたいというのは、本来の人間の死の姿であると確信してのことであった。1週間程度皆が集まり、周囲で孫が走り回り、犬が吠える、そんな自宅で亡くなった方。看護師をしていた娘が、看取りのため1週間休暇をとり、母を看取った家族。数ヵ月間看病をしていて、娘が入浴をしているわずかな時間に息を引き取ってしまったという家族。どなたも非常に満足な看取りであったとのことであった。

私の周囲では、在宅死が増え訪問診療を行う医師も確実に増えている。医師や看護師に手厚い医療・看護を受け、最後を迎えるのも良いが、家族の愛に包まれ、家族の声を聞き、自宅の匂いを感じながら旅立つのも悪くはない。



桜の季節と 《迎賓館のみえる土手》

常任理事 橋本 洋一

桜の季節が今年もやってきた。定宿にしているOホテルの正面玄関から歩いて約3分で土手の左端に辿り着く。JR四谷駅に向かって足を進めると、やがて桜色一色となる。ここ数年間、3月下旬、この土手で桜の花をみて春の到来を確認するのが恒例になっている。この土手は上智大学の構内とグラウンドの境界を形作っていて、新宿方面に目をやると、現在迎賓館として利用されている旧赤坂離宮がみえる。

この土手は私にとって特別な意味を持つ場所なのである。私達3人にとってといった方がより正確なのかもしれない。なぜなら、この約40年間ずっと我々3人が再会する場所であったからである。

我々3人はS予備校で知り合い意気投合してこの40年間旧交を暖めてきた。私とT君は医学部に、S君は工学部に進学した。S君は父上が国立大学の教授で厳格な家庭で育ったせいか、襟を正したような真面目人間で、私が言った冗談が通じないことがしばしばあった。S君は大学院に進んだが、彼の研究対象と担当教授の研究がかみ合わず、修士課程2年間で大学を去り、国内最大手医療機器メーカーであるT社の医療機器研究部門に就職した。

T君は名門日比谷高校が隆盛を極めた時期の最後の卒業生で、彼の出身大学がある県の公的病院の副院長となり、癌専門医として活躍し2年後、院長就任が予定されていた。民間のPETセンター開設に先立って、招待されて撮影したPETでたまたま膀胱癌が発見され、膀胱全摘術を施行し4年半に渡る闘病生活の末に帰らぬ人となった。彼から膀胱癌が見つかったとの電話を貰って以来、一緒に出かけた山陰への学会等の思い出が走馬燈のように頭に蘇った。

『最後まで決して諦めることのない闘病生活でした』と書かれた奥さんからの葉書を見ていると、涙で文字が見えなくなった。

この《迎賓館のみえる土手》は私達の人生を見つめ続けてくれた場所でもある。五分咲の桜の花を見つめながら、今年もS君とこの場所で、亡きT君との思い出に花を咲かせたいと思った。